

曖昧さへの態度と思考抑制が強迫傾向に与える影響について

HP26-0024E 関海真

問題・目的

生涯有病率 2.3%とされている強迫症は強迫観念および、強迫行為の存在で特徴付けられています。強迫症の強迫的な思考や行動は、単に病的な症状だけでなく、健常者にも強迫傾向という強迫症と似たような心理的傾向が認められています。この強迫傾向などといった不適応や偏った態度と関連があるとされているものに「曖昧さ」という概念があります。西村(2007)はこの曖昧さを肯定的態度 2 因子、否定的態度 3 因子の計 5 因子で構成されている曖昧さへの態度尺度を作成しました。この西村(2007)の研究では曖昧さへの態度と強迫傾向の関連性が示されました。曖昧さへの態度に加え、精神疾患において顕著にみられる認知過程の一つに「思考抑制」があります。思考抑制を生じさせる要因には、白黒はっきりさせるべきという完全主義的な認知様式が関連している可能性が考えられ、白黒つけるか否かという曖昧さへの態度が思考抑制に影響しているのではないだろうかと考えました。本研究では、西村(2007)の研究で有意な相関がみられた、曖昧さへの否定的態度の不安と統制の 2 因子と思考抑制と強迫傾向の確認・清潔・優柔不断・疑惑について検討しました。

方法

質問紙による調査を行いました。調査対象者は神奈川県内の私立大学生 127 名(男性 45 名、女性 82 名)でした。質問紙には、強迫傾向を測定するために MOCI 邦訳版(吉田・切池・永田・松永・山下)、曖昧さへの態度を測定するために曖昧さへの態度尺度(西村, 2007)、思考抑制を測定するために思考抑制尺度(松本, 2008)を使用しました。

結果・考察

思考抑制を媒介変数とした媒介分析を行った結果、曖昧さへの不安の場合、部分媒介が認められ、何らかの影響により思考抑制が媒介していることが明らかとなりました。曖昧さへの統制の場合、思考抑制を媒介変数とした媒介分析を行った結果、完全媒介が認められました。このことから、統制できないものを過度にコントロールしようとする、強迫的な状態から思考抑制が生じてしまい、思考抑制が強迫傾向の増強要因となる可能性が示唆されました。